

【目次】

1. 総説	003
2. 図版	005
3. 文様とその意味	091
4. 蛍光X線分析による金属組成	105
5. 掲載作品目録	122

【凡例】

- ・本図録は第114回展覧「中国鏡でめぐる神仙世界」(平成27年10月17日～11月29日)にあわせて編集、発行した。ただし、展覧会の総目録としてではなく、掲載作品を絞ることで部分拡大や角度の異なる画像を増やし、鏡の細部を確認しやすいように配慮した。
- ・図版については、番号、作品名、法量、制作年代、所蔵者の順に記した。
なお、限られた紙数のなかで出来る限り見やすくするために、実寸の大小にかかわらず、図版の大きさを一定にした。
- ・図版のうち、和泉市久保惣記念美術館、黒川古文化研究所、泉屋博古館の所蔵作品はすべて深井純氏の撮影による。また、京都国立博物館の所蔵作品については、同館より借用した。
- ・本図録の執筆、編集は研究員の川見典久、画像処理・加工、レイアウトは小川依が担当した。



総説

■古代中国における鏡

中国清朝以前、鏡は銅に錫をまぜた青銅を用いて鑄造された。新石器時代後期の遺品がいくつか知られ、殷、周、春秋時代にも少ないながら出土がある。限られた出土数から、このころの鏡は姿を映すというよりも、儀式における採火や採光、光の反射を利用した情報伝達などへの利用が想像される。やがて戦国時代になると多くの墓から副葬品として出土するようになることから、ある程度以上の階層に広く普及していたとわかる。『戦国策』齊策篇の逸話には美男子として知られた斉の宰相・鄒忌が出仕前に鏡をのぞき込み、城北の徐公との容姿の優劣を妻に聞く場面があり、姿見として使用されるようになったことを反映しているとみられる。以降、近代に至るまでそれぞれの時代に応じた形式の鏡が制作された。

湖南長沙の馬王堆1号漢墓から出土した鏡は、絹製の手袋、スカーフ、パフ、付け髪、胭脂(紅)や白粉などの化粧品、象牙やツゲ製の櫛とともに上下二層に分かれた漆塗の化粧箱(奩)に入った状態で見つかった。東晋・顧愷之の作とされる『女史箴図巻』(大英博物館)には鏡架に置かれた鏡を前に化粧をする女性が描かれており、その傍らにはよく似た化粧箱が置かれている。化粧道具として鏡が欠かせないものであったことがわかる。

また、鏡は男女の契りを象徴するものであった。六朝時代には、夫婦が婚姻するとき、一緒に鏡の紐を結ぶ習俗があったという(『西陽雜俎』礼異)。漢・辛延年の「羽林郎詩」(『玉台新詠』卷一)には近衛兵が酒家の胡姬に青銅の鏡を贈ったことがみえ、六朝・劉敬叔の志怪小説『異苑』卷六には、男性が贈った銀鈴に対して女性が青銅鏡を返して夫婦の契りを結んだ逸話がみられるなど、鏡を愛の証として贈ったことが窺える。別れ別れになる夫婦が鏡を割ってそれぞれ半分を持ち、再会の時の信にしたという故事もよく知られている(『太平御覧』七一七所引『神異経』、唐・孟榮『本事詩』情感篇)。

一方、鏡をはじめて作った人物として、中国を統治した諸王朝の始祖とされる黄帝(『軒轅黄帝伝』、『述異記])や、太古の伝説的英雄・堯の師として知られる尹寿(『玄中記』)の名前が伝承され、鏡に神秘的な役割やイメージがあったことも窺える。六朝時代の『西京雜記』によると、秦の咸陽宮には幅4尺、高さ5尺9寸の方鏡があったという。

〔漢の〕高祖、初めて咸陽宮に入り、庫府を周行す。…方鏡有り、広は四尺、高さ五尺九寸、表裏に明有りて、人直(まむかい)に来たりて之に照らせば、影は則ち倒見す。手を以て心を捫して来れば、則ち腸胃五臓を見(あらわ)し、歴然として礙(さまた)ぐるなし。人の疾病の内に在るあれば、則ち心を掩いて之に照らせば、則ち病の在る所を知る。また女子に邪心あれば、則ち胆張りて心動く。秦始皇、常に以て宮人を照らし、胆張り心動く者は則ち之を殺す。

この鏡の前に立つと、その者の疾病や邪心がたちどころに露わになるといい、始皇帝は常日頃、後宮の女官をこれで照らし、不義ある者はこれを処刑したと伝える。そのものの内面や本質までを照らし出すとして、辟邪の力があるとも信じられた。『抱朴子』には鏡を持って山に入れば、人間に化けた邪鬼の本性を見抜くことができるとし(内篇 登涉)、また、七夕の晩に9寸以上の鏡に見入ると神仙がその中にあらわれるという(内篇 雜応)。やがて鏡の呪術性をあらわすこれらの見方は、唐代のはじめに小説『古鏡記』として結実する。

■鏡の背面

鏡の背面にはさまざまな図様があらわされている。単なる装飾文様ではなく、ここには当時の人びとが考えていた天地の構造や天上世界のありさまが反映されている。戦国時代の鏡には、地文様として細線と珠点で構成する細文や、螭(龍の一種)をあらわした文様由来する羽状文などを充填し、龍や鳳、熊のような頭を持つ尾の長い獣、さまざまな幾何学文様を主文様として配する。その配置や表現からは、外縁と内圏を天・地になぞらえて当時の世界観・宇宙観をあらわしたことが窺える。前漢時代に出現する草葉文鏡や星雲文鏡、連弧文鏡(内行花文鏡)、方格規矩文鏡なども形式は異なるものの同様である。やがて後漢に入ると神仙思想を背景に西王母をはじめとする神仙やさまざまな神獣をあらわした画像鏡や神獣文鏡が大流行する。銘文を鑄刻することも多く、鏡背文様の意味や当時の思想を解明する手がかりを与えてくれる。一方、唐代の鏡背には古代からの龍、鳳凰、麒麟とともに、獅子や天馬、孔雀をはじめとする禽獣、パルメット、海石榴華、葡萄唐草などの植物といった西域由来する文様があらわされる。その多くは神仙世界のありさまとして表現されるものの、それまでの神話的世界や宇宙観の色彩は薄れ、吉祥の意味が大きくなる。

このように鏡背の文様は、中国の思想や精神の歴史を知る重要な資料であり、広い研究分野において利用されるべきものといえる。しかしながら、専門的に研究しているものでなければこれらの図様を眼で追うのも難しく、また、中国美術史や考古学の分野で図像の具体的な意味を追求する研究は必ずしも盛んではない。図録などに付された文様の解説を読んでも根拠

1. 青銅 羽狀文地四葉文鏡

径 9.1 cm 戦国時代 黒川古文化研究所

戦
国



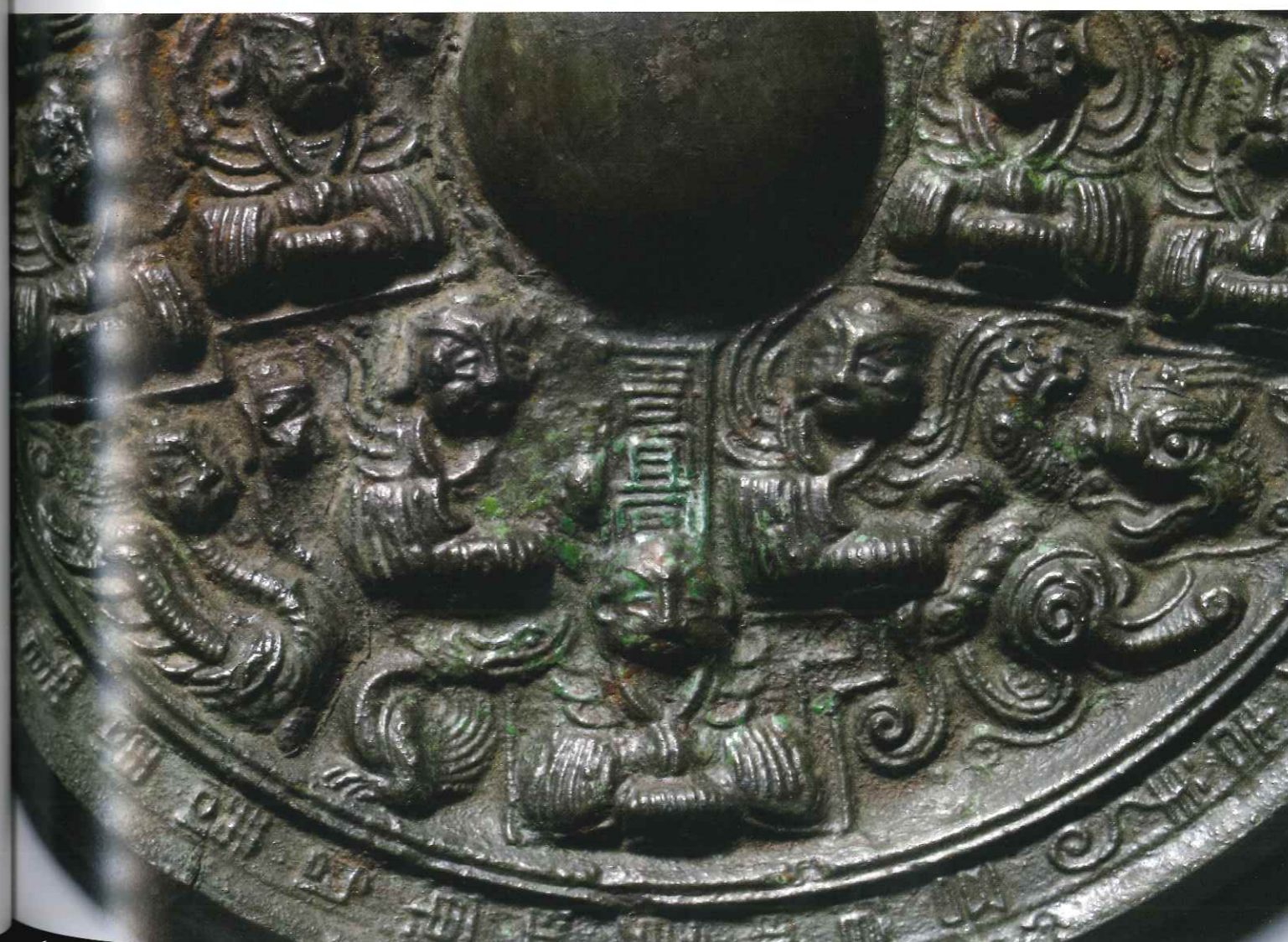
19. 青銅 「建安十年」重列神獸文鏡

徑 13.1 cm 後漢時代 (A.D. 205 年) 黒川古文化研究所

後
漢



銘文「吾作明鏡(鏡) 幽溲宮商 周羅容象 五帝三皇 白(伯)牙單(彈)琴 黃帝除兇 白牙朱鳥 玄武白虎 青 建安十年五月六日作 宜子孫 大吉羊(祥)」



四葉文・草葉文

【概要】

漢代の鏡には中央に位置する鈕のまわりに四つの宝珠形をあしらうものがある(挿図1)。日本では「四葉文」、中国では「柿蒂文」と呼ばれてきたものの、林巳奈夫はこれを墓室天井に刻される蓮の花(挿図2)と同様、天の中心、北極に位置して天帝(太一)の居する天極星を象徴する蓮の花と考え、「四弁花文」と称すべきであるとした〔林 1987〕。

一方、戦国時代には鈕のまわりに設けた方格または円圏の四方に、葉文を配する鏡がある(図版1)。蕾状になるもの(挿図3)、茎の先に逆ハート形が付くもの(挿図4)など同時代にいくつかの類型があり、蓮の花にはみえないことから、上記の「四弁花文」とは区別されるべきものと考えられる。熊のような獣が互いに尾をつかんでめぐる四獣文鏡のなかに、挿図3に近い葉文から逆L字形の構造物が伸びる例がある(挿図5)。この獣は大地をあらわす中央の円圏と、天をあらわす周縁の双方に脚を置いて踏ん張ることから天を支える神獣とみられ、その獣が掴むことから、この構造物も天を支える「天柱」(「銅柱」)の機能を有するものとする説もある(資料1、2)〔曾布川 2014〕。

戦国から前漢時代の蟠螭文鏡や草葉文鏡にある樹木文様(挿図6、7)と通じるものとするれば、太陽の運行にかかわる「扶桑」や「若木」(資料3~7)、天帝が天と地を登り下りする天梯の役割を有す「建木」(資料5、8、9)などの伝説上の巨木との関係が注目される。ただし、「扶桑」が太陽や鳥とともにあらわされ(挿図8)、「建木」をあらわすとみられる、いわゆる三段式神仙鏡の樹木がとぐろを巻く特徴的な姿(挿図9)で表現されるのと異なり、樹木の性格を示す具体的な描写は少なく、今のところ特定の樹をあらわしたものかどうかは不明確である。

【関連記事】

資料1 『淮南子』天文訓

昔、共工は顛頊と帝為らんことを争ひ、怒りて不周の山に觸る。天柱折れ、地の維絶え、天は西北に傾く。故に日月星辰移る。地は東南に満たず、故に水潦塵埃歸す。

資料2 『神異経』(『水経注』第一 所引)

崑崙に銅柱有り。其の高きこと天に入る、所謂天柱なり。圍三千里、円くして周りは削りしが如し。

資料3 『山海経』海外東経

下に湯谷有り。湯谷の上に扶桑有り、十日の浴する所なり。黒齒の北に在り。水中に居る。大木有り。九日下枝に居り、一日上枝に居る。

資料4 『山海経』大荒東経

湯谷の上に扶木有り。一日方に至り、一日方に出ず。皆鳥に載せらる。

資料5 『淮南子』墜形訓

扶木は陽州に在り、日の噴す所。建木は都廣に在り、衆帝の自りて上下する所。日中に景無く、呼べども響無し。蓋し天地の中なり。若木は建木の西に在り、未に十日有りて、其の華、下地を照らす。



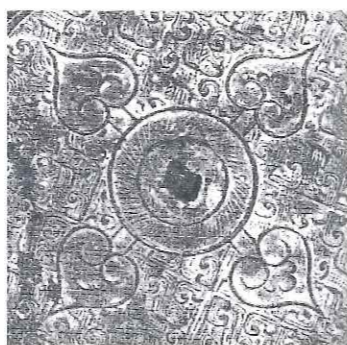
(挿図1) 図版13より



(挿図2) 山東沂南画像石墓前室東間藻井彫刻 後漢



(挿図3) 羽状文地四葉文鏡(部分) 戦国 湖南長沙糸茅冲墓78出土



(挿図4) 羽状文地四葉文鏡(部分) 戦国 湖南長沙桂花園墓6出土



(挿図5) 図版4より

資料6 『十洲記』

扶桑は碧海の中にあり。葉は桑樹に似たり。長さ数千丈、太さ二千圍。西兩根を同じうし、更相に相依倚す。是れ扶桑と名づくるなり。

資料7 『山海経』海内経

南海の外、黒水・青水の間に、木有り、名けて若木と曰ふ。若水焉より出づ。

資料8 『山海経』海内経

木有り、青葉紫茎、玄華黄実なり。名けて建木と曰ふ。百仞にして枝無く、九欄有り、下に九栒有り。其の実は麻の如く、其の葉は芒の如し。大皞爰に過り、黄帝の為むる所なり。

資料9 『山海経』海内南経

木有り。其の状は牛の如く、之を引けば皮有り、纓(冠の紐)・黄蛇の若し。其の葉は羅(綾織の薄絹)の如く、其の実は樂(菩提樹のような木)の如し。其の木は筐の若く、其の名を建木と曰ふ。翼廡の西、弱水の上に在り。

山字文

【概要】

戦国時代後期に流行した鏡背文様のひとつに、「山」字形を配したものがある。4つの「山」を配する四山字文鏡がもっとも多くを占め(図版2)、五山字文鏡(図版3)、六山字文鏡(挿図10)がそれに次ぐ。中央の縦画の先が周縁に接し、左に傾いてあらわされるものが大半を占める。中央の方格や円圏に葉文を配することが多く、そこから網状の文様が山字文の間に伸び、先端にも葉文や四弁花文を付け、さらにその先に左に折り曲げた水滴形(竹葉文)を付ける(挿図11)、あるいは二股に出た綱が、山字の長画と短画の間で葉文により連結される(挿図12)など、さまざまな類型が認められる〔廣川 2005〕。以上のような構成から、これらは「山」字をあらわしたものではなく、天地の間にある何らかの構造物をあらわすと考えられ、その候補のひとつとしては、天から釣り下がった一種の鉤が考えられよう(資料14)。つまり天が北極星を中心に左回転するのに合わせて(資料15~17)山字文は左傾しているのであり、それに伴って大地も回転することがないよう、繩状文とは完全には連結されないとされる〔曾布川 2014〕。

連弧文(内行花文)

【概要】

星雲文鏡(図版10)、草葉文鏡(図版11)など前漢時代の鏡には、周縁が十六の半円をつないだ形になり、その部分を厚く作ったものがある。意味は明らかではないものの、インド北部マトウラ出土の仏像光背にみられる表現との酷似や、鏡が日輪にたとえられることなどから、光明の表現と推測されている〔中野 2015〕。

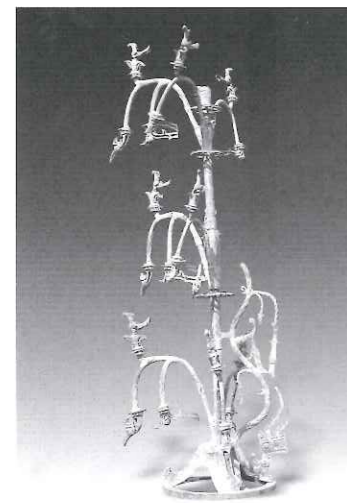
一方、内区に八つの円弧を内向きに配した鏡式が戦国時代にはすでにあらわれている(図版6)。前漢中期には外区に銘文を有するものがあり(図版12 異体字銘帯鏡)、やがて後漢時代になると銘文帯が雲雷文帯に変化した(図



(挿図6) 図版9より



(挿図7) 図版11より



(挿図8) 青銅 巨大神樹 股 四川広漢三星堆2号祭祀坑出土



(挿図9) 三段式神仙鏡(部分) 後漢 シアトル美術館

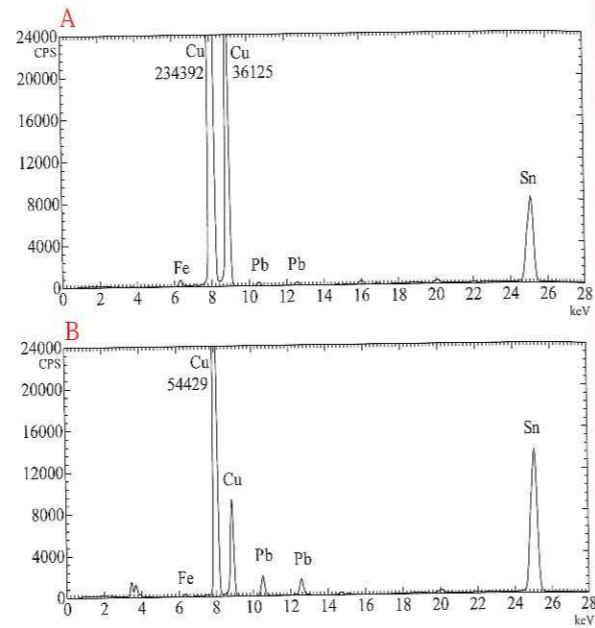


(挿図10) 六山字文鏡 戦国 廣東広州象崗山南越王墓出土

1. 青銅 羽状文地四葉文鏡 径 9.1 cm
戦国時代 黒川古文化研究所



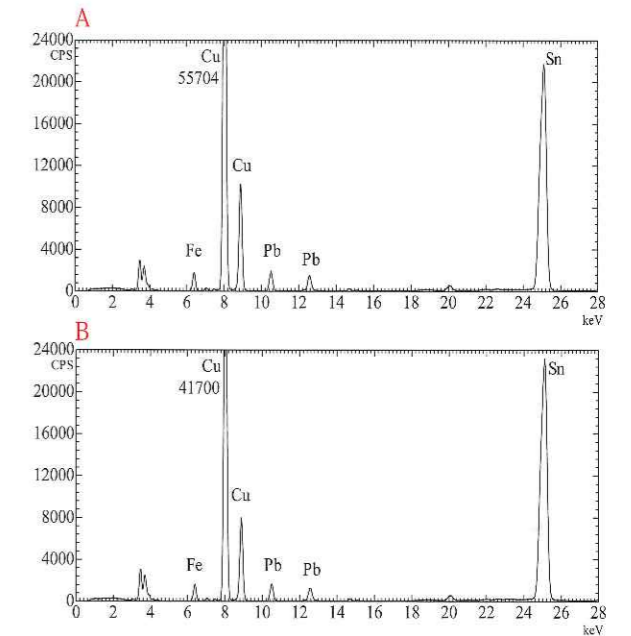
測定点	銅 Cu	錫 Sn	鉛 Pb	鉄 Fe	ヒ素 As	軽元素 LE
A	84.0	8.0	0.3	0.1	—	7.4
B	47.7	25.4	1.8	0.3	0.2	13.6



4. 青銅 羽状文地四獣文鏡 径 17.0 cm
戦国時代 黒川古文化研究所



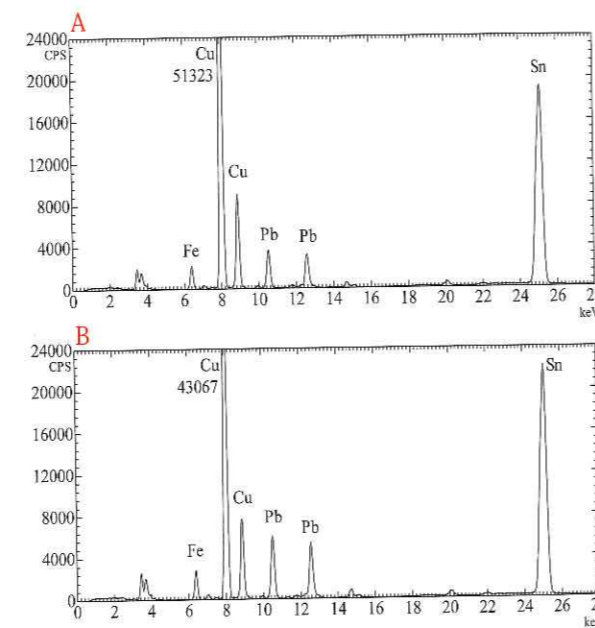
測定点	銅 Cu	錫 Sn	鉛 Pb	鉄 Fe	ヒ素 As	軽元素 LE
A	42.5	31.5	1.3	2.8	0.2	8.1
B	32.3	32.7	1.0	2.8	0.1	16.7



2. 青銅 羽状文地四山字文鏡 径 15.8 cm
戦国時代 黒川古文化研究所



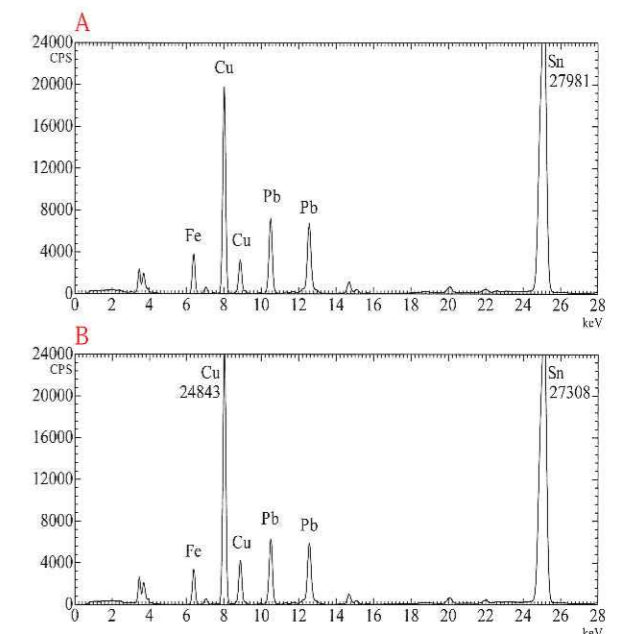
測定点	銅 Cu	錫 Sn	鉛 Pb	鉄 Fe	ヒ素 As	軽元素 LE
A	38.1	27.7	2.8	3.4	0.1	16.1
B	28.9	26.8	3.6	4.0	0.2	21.5



5. 青銅 羽状文地変形獣文鏡 径 13.7 cm
戦国時代 黒川古文化研究所



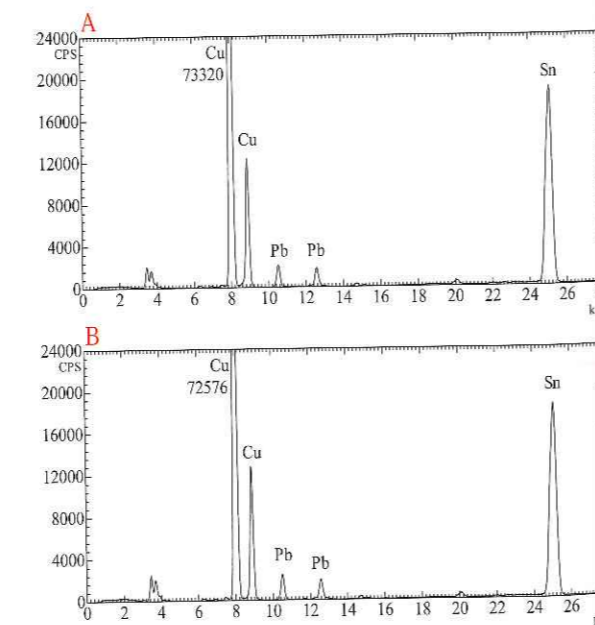
測定点	銅 Cu	錫 Sn	鉛 Pb	鉄 Fe	ヒ素 As	軽元素 LE
A	12.9	32.2	3.6	6.2	—	32.9
B	16.5	30.9	3.4	5.5	—	10.7



3. 青銅 羽状文地五山字文鏡 径 16.9 cm
戦国時代 泉屋博古館



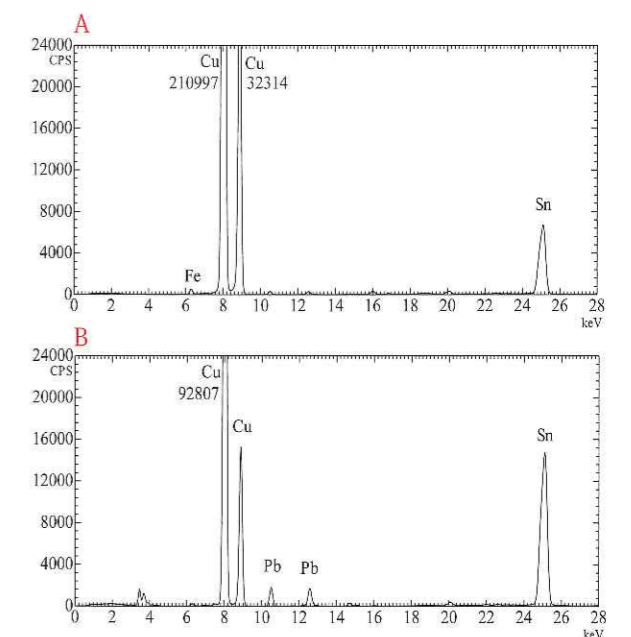
測定点	銅 Cu	錫 Sn	鉛 Pb	鉄 Fe	ヒ素 As	軽元素 LE
A	51.6	28.4	1.7	0.1	0.1	6.6
B	51.0	27.3	1.8	0.0	0.2	7.5



6. 青銅 細文地四鳳連弧文鏡 径 19.4 cm
戦国時代 黒川古文化研究所



測定点	銅 Cu	錫 Sn	鉛 Pb	鉄 Fe	ヒ素 As	軽元素 LE
A	89.8	8.0	0.3	0.0	—	—
B	64.9	24.0	1.9	0.1	—	—



掲載作品目録

番号	作品名	法量	制作年代	所蔵
1	青銅 羽状文地四葉文鏡	径 9.1cm	戦国時代	黒川古文化研究所
2	青銅 羽状文地四山字文鏡	径 15.8cm	戦国時代	黒川古文化研究所
3	青銅 羽状文地五山字文鏡	径 16.9cm	戦国時代	泉屋博古館
4	青銅 羽状文地四獣文鏡	径 17.0cm	戦国時代	黒川古文化研究所
5	青銅 羽状文地変形獣文鏡	径 13.7cm	戦国時代	黒川古文化研究所
6	青銅 細文地四鳳連弧文鏡	径 19.4cm	戦国時代	黒川古文化研究所
7	青銅 細文地蟠螭樹木文鏡	径 14.0cm	戦国時代	泉屋博古館
8	青銅 雲雷文地蟠螭文鏡	径 20.8cm	戦国～秦時代	泉屋博古館
9	青銅 雲雷文地「大楽貴富」四龍四葉文鏡	径 17.0cm	前漢時代	黒川古文化研究所
10	青銅 星雲文鏡	径 10.9cm	前漢時代	黒川古文化研究所
11	青銅 「見日之光」草葉文鏡	径 14.0cm	前漢時代	京都国立博物館
12	青銅 「鍊冶銅華」連弧文鏡	径 18.3cm	前漢時代	京都国立博物館
13	青銅 「泰山作」方格規矩四神神獣文鏡	径 22.1cm	前漢 ～後漢時代	和泉市久保惣記念美術館
14	青銅 「尚方作」方格規矩四神神獣文鏡	径 22.7cm	前漢 ～後漢時代	和泉市久保惣記念美術館
15	青銅 「長宜子孫」連弧文鏡（内行花文鏡）	径 20.4cm	後漢時代	泉屋博古館
16	青銅 仙人四獣文鏡	径 17.9cm	後漢時代	和泉市久保惣記念美術館
17	青銅 「西王母 東王公」車馬画像鏡	径 21.7cm	後漢時代	黒川古文化研究所
18	青銅 半円方形画文帯環状乳神獣文鏡	径 14.8cm	後漢時代	泉屋博古館
19	青銅 「建安十年」重列神獣文鏡	径 13.1cm	後漢時代 (A.D.205年)	黒川古文化研究所
20	青銅 「甘露五年」獸首文鏡	径 16.7cm	三国・魏時代 (A.D.260年)	黒川古文化研究所
21	青銅 「寶鼎二年」半円方形帯神獣文鏡	径 12.1cm	三国・呉時代 (A.D.267年)	黒川古文化研究所
22	青銅 「吾作」半円方形画文帯神獣文鏡	径 20.3cm	魏晉南北朝 ～隋時代	黒川古文化研究所

番号	作品名	法量	制作年代	所蔵
23	青銅 「盤龍麗匣」狻猊文鏡（六狻猊鏡）	径 19.3cm	隋時代	泉屋博古館
24	青銅 「仙山並照」团華文鏡	径 21.7cm	隋～唐時代	和泉市久保惣記念美術館
25	青銅 「光流素月」唐草狻猊文鏡	径 14.9cm	隋～唐時代	京都国立博物館
26	青銅 「光流素月」四獣文鏡	径 13.6cm	隋～唐時代	黒川古文化研究所
27	青銅 十二支走獣文鏡	径 13.5cm	隋～唐時代	京都国立博物館
28	青銅 「永徽元年」方格規矩四神文鏡	径 18.5cm	唐時代	黒川古文化研究所
29	青銅 海獣葡萄文鏡	径 24.2cm	唐時代	泉屋博古館
30	青銅 海獣葡萄文鏡	径 17.1cm	唐時代	和泉市久保惣記念美術館
31	青銅 宝相華文八稜鏡	径 21.8cm	唐時代	黒川古文化研究所
32	青銅 雲龍文八稜鏡	径 20.1cm	唐時代	黒川古文化研究所
33	青銅 胡人騎獅子瑞花文八稜鏡	径 28.8cm	唐時代	黒川古文化研究所
34	青銅 「鳳凰雙鏡」高士彈琴文八花鏡	径 22.4cm	唐時代	黒川古文化研究所
35	青銅 「真子飛霜」高士彈琴文鏡	径 20.3cm	唐時代	和泉市久保惣記念美術館
36	青銅 双鶴対鴻文八花鏡	径 21.8cm	唐時代	黒川古文化研究所
37	青銅 吹簫飛鳳文八花鏡	径 13.2cm	唐時代	泉屋博古館
38	青銅 桂樹月兔文鏡	径 12.1cm	唐時代	和泉市久保惣記念美術館
39	青銅 花枝文八花鏡	径 28.0cm	唐時代	京都国立博物館
40	青銅 瑞樹文鏡	径 34.2cm	唐時代	和泉市久保惣記念美術館
41	青銅 海磯文鏡	径 14.7cm	唐時代	京都国立博物館
42	青銅 十二支瑞図仙岳文八花鏡	径 21.9cm	唐時代	京都国立博物館